

一心寺かわら版

第四十六号 平成三十一年三月発行

ホームページ・ブログ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

お寺の掲示板大賞二〇一八 笑い飯哲夫賞 受賞



仏教伝道協会主催「輝け!

お寺の掲示板大賞二〇一八」

において、「笑い飯哲夫賞」

を受賞しました。仏教伝道協

会は、よくホテルで目にする

『仏教聖典』を無料配布する

などして、仏教が持つ東洋の

叡智を一人でも多くの人へ

伝えるために広く世界で活

動を行っています。



受賞作は十月の言葉、「君たちがいて僕がいる」。吉本新喜劇・チャーリー浜さんのギャグです。笑い飯哲夫さん(上)は二〇一〇年Mリーグランプリで優勝した漫才師。仏教に造詣が深く、本も出版されており、昨年は本山興正寺で講演もされました。哲夫さんの講評は「子供の頃から好きなギャグでしたがよくみると深い。一人で生きているんじゃないという、慈悲を感じる言葉ですね」。

お寺の掲示板大賞はメディアでも話題になりました。この言葉を掲示した理由を問われ、「仏教は縁起を説きます。すべてのものは様々な縁によって成り立っています。ただそ

れ一つで独立して存在するものは何一つとしてありません。「君たち」とは人間、動物のみならず、もの、僕たちが気付かないはたらくも含めていると見ます。君たちがいての「僕」、僕は君たちで成り立っている。それは安らぎにも、平和にも繋がるのではないでしようか」とお答えしました。



昨年他にも、明石家さんまさんの「生きてるだけで丸儲け」も掲示しました。子供の頃はただ笑って聞いていたが、最近、この言葉がさんまさんの深い人生経験から出ていることを知りました。さんまさんはプライベートなことはあまり話さないのですが、継母に育てられたのだそうです。まったく愛情を注いでくれず、可愛がるのは実の息子の弟ばかり。それでも弟のことをとても可愛がったそうです。ほしいと一生懸命面白いことをしたそうです。みんなを笑わせていました。その愛する弟が十九才で、火事で焼死してしまいました。その時も、自分が焼死していたら新聞の見出しは「さんま丸焼けやな」と周りを笑わせたそうです。

そして、皆さんの記憶にも残っているであろう日航ジャンボ機墜落事故。坂本九さんなど五二〇人が亡くなられました。実は、さんまさんは東京でのテレビ収録と大阪でのラジオ番組との往復にこの便をよく使っており、この日も搭乗予定だったそうです。この日は収録が早く終わったために一便早いものに変更し、偶然にも墜落した飛行に乗ることなく命を長らえました。さんまさんがこのように丸儲けが以前とは違って聞こえてきます。

これは仏法の言葉ではないか。私たちは自分の力では生まれることも、生きることもできません。私以外の力によって生まれさせていただいた、生かさせていただいているというのが本当のところ。だから、生きてることは丸儲け。しかし、儲けものだから後は何をしてよいのだということにはならないでしょう。生きてるだけで丸儲けなのだから、いただいたものにただ感謝するしかない。私ではないもののはたらきに感謝して人生を生きていこうという言葉なのではないでしょうか。

また、B・Z・稲葉浩志さんの「すべては何かのイチブってことに僕は気づかない」(『ミエナイカラ』より)も取り上げました。

お釈迦さま、親鸞さん、高名なお坊さんの言葉以外にも素晴らしいことばがたくさんあります。このような有名人の言葉からも仏の心を感じ取っていただければ有難いことです。

F M 高松ラジオ出演を終えて

高松市称讃寺住職・瑞田信弘氏(左端)が司会を務める「瑞田和尚のちよつとこらでほつと一息つきましよう」。一心寺住職としての活動、真宗興正派西讃教区教務所長として詳しい県内の寺院事情を踏まえて、お寺の今とこれからについて話してほしいとのことでした。四国霊場第七十六番の金倉寺・村上哲済氏(右端)、高松市大乘寺住職・中原大道氏(右奥)とご一緒させていただきました。自己紹介と宗派の説明が終わって本題へ。



●最近のお寺事情について。葬儀、法事は昔と変わってきましたか。—法事、葬儀も昔は五人、十人で勤めていたものが今は二人、三人。お坊さんの出番が減っています。昔の家での葬儀はお坊さんで座敷が一杯でした。親戚はお花ではなく、お坊さんをお経をお供えしました。現在は、導師を務めることが多いお坊さん以外は法要数が急激に減少しています。以前は門徒(檀家)の少ない寺院も必要とされていきました。地域密着で、大きな寺院が忙しくてお参りできない部分を補う存在でした。

全体的な法要数の減少は、人口減少、宗教離れという時代の流れもあるでしょうが、お寺側の力不足、怠慢があったことは認めなければなりません。明治、大正、昭和とお寺を取り巻く状況はかなり厳しいものでした。高度成長期になって経済的に豊かになり、人に寄り添うことを置いてきぼりにした部分もあったのだと思います。

●今でも威張っているお坊さんが多いと感じるのですが。

—それがお寺離れの一因かも。自省しなければなりません。聞徒さんとの信頼関係がなくなりつつあるのではないのでしょうか。それを築けるかどうかが大切だと思います。私自身、学生時代まではお坊さんに良い印象はありませんでした。しかし、住職になって近隣のお坊さんと交流するようになって分かりましたが、ほとんどの方は真面目で良い方です。有難い環境だと思っています。

●過去と現在ではお寺の役割は変わりましたか。以前は地域コミュニティの中心として、困り事があつたらお寺を訪れました。

—残念ながら役割が減っていると感じます。未来の住職塾・松本紹圭氏は「お寺は先祖と仏教の二階建て」と言われます。それぞれどこか、昔のお寺は、いわば何階建てものデパートだったのでしよう。まず、江戸時代には役所でした。これには良し悪しがあると思

ますが、当時多くの人々が集う場所といえはお寺だったのでしょ
う。また、学びの場でもありました。寺子屋、各種の習い事の会場。
一心寺の本堂は明治三十年代、観音寺第一高等学校の前身である
丸亀中学校三豊分校設立時の校舎でした。また、文化芸能の場でも
ありました。落語はお説教から生まれまし、能舞台があるお寺
も数多くあります。親鸞聖人の時代のお勤めである礼讃や和讃は、
今でいう流行歌と言ってもよいと思います。そして、遊び場。子ど
もたちが自由に走り回っていました。それを誰彼となく大人が見
守っていました。このような昔のお寺の姿に憧れます。

●浄土真宗は、お聴聞が大事ということを強調し過ぎて、お念仏し
ている人だけに向けて話を聞いていただくという形になっていな
いでしょうか。お寺である以上、基本的に、みなさんどうぞとい
う姿勢が必要でしょう。

―みなさんどうぞと思ってもどうすればよいか、なかなか分
からないのだと思います。入り口は、当然ながらお寺によって違
います。立地、町の雰囲気、檀家の範囲、住職の個性。一心寺は旧町
内、徒歩や自転車で行き



交う場所にあります。縁あって、
瀬戸内国際芸術祭の公式プロ
グラムにもなった「よるしるべ」
という夜のまち歩きに協力す
ることになりました。その中で
「よるしらべ」という声明雅楽
コンサートを開催することで、
多くの方にお寺を知っていた
だ、本堂に参拝していただく
きっかけになりました。

また、近頃のお城ブーム、
「西讃の山城」という本も好
評らしく、一心寺の山門は旧
観音寺城門が移築されたもの
であることが広く知られまし
た。このように様々な形でご
縁を広げることができるので
はないかと思っています。

★初めて「よるしるべ」への協
力依頼を受けた時、ディレク

ター、アーティスト全員と本堂で話をしました。その時に、お寺作
りと街作りは同じだと感じました。人がいないと成り立たない。必
要とされないと消えていく。喜びや感動を共有する場となること
が重要だと思いました。時々「若い院主さんの代になって色々新し
い取り組みが増えましたね」と言われます。しかし、新しいことを
しようとしているわけではありません。昔のお寺の良い雰囲気を
取り戻したいと思っています。

まずはお寺を知っていただく。次は、話をしてお互いの理解を深
める。それで信頼が築けたなら、いよいよ仏法の出番。人が集まる
ところに喜怒哀楽、悩み苦しみが共有される。そこに教えが生きて
きたのだと思います。生まれる、生きる、死ぬということをどのよ
うに受け止めるのかを聞き開くのが仏法の本質。お寺の中心役割、
他ではできない、なくてはならないものです。その他、お寺でもで
きるものも必要に応じて取り組む。

楽しみを与える、苦しみを和らげる、両方大切です。しかし、後
者は大変難しいことです。まずは、お寺は誰が訪ねていっても話が
できる、そういう場所になればと思っています。



●人々はお寺に何を求めているのでしょうか、法事と葬式だけしてくればよいと考えているのでしょうか。それ以上のことは期待していいのでしょうか。

—そうなりつつあるでしょう。本当はお坊さんにもっと期待してほしいと思います。現在は、何を期待すればよいかわからない、何かあったとしてもそれはお坊さんに期待すべきものではない、という感じでしょうか。

●とにかくお寺の活動も何か工夫はしないといけないでしょう。

—苦手なことは置いておいて、得意なことからやってみる姿勢が大事だと思います。ただ一人では難しいことが多い。個人が、決まった時間に決まった場所で行わなければならない活動は住職には厳しい。グループで考えを共有して、誰かが対応できる状態ができれば、可能性が広がるのではないかと思います。

私ができなくても誰かがやってくれるなら安心。若い方でも、年配の方でも、誰でも信頼できるつながりがあれば安心して生きていきます。それを助ける存在としてお寺が機能すれば良いなと思っています。

●最後に目指すお寺、お坊さん像は。

—みなさんに「院主さんに任せていたら安心やな」とおっしゃっていただいて、「はい、大丈夫ですよ」と応えられるようになれば嬉しい。安心を与えられるような存在になれると思います。

★今回のラジオ出演でお寺の役割を改めて考えさせられました。未熟な身で大層なことを話してしまいました。少しでも良いお寺になるよう努めていきたいと思えます。今後ともご指導ご協力をお願いいたします。
(※放送内容をまとめ、さらに加筆しました)

報恩講報告

暖かな日差しの中での報恩講。

立専寺ご住職導師のもと、讚仏偈、正信偈をお勤め。法話は川田慈恵師（高松市・妙楽寺）。

『現世利益和讃』の「一切の功德にすぐれたる 南無阿弥陀仏をとかならば 三世の重障みなながらかならず転じて軽微なり」。南無阿

弥陀仏とは『正信偈』にある「帰命無量寿如来、南無不可思議光」。阿弥陀仏ははかりしれないひかりといのち。親鸞聖人は「南無阿弥陀仏をとかならば…よるひるつねにまもるなり」と五回繰り返されている。昼の前に夜があるのは一見すると不思議。昼は明るく、ものが見えているのであまり怖さは感じない。夜は暗くて見えないため怖い、安心できない。そのような夜（暗闇）こそ、ひかりといのちのはたらきである阿弥陀さまが護るぞとおっしゃってくださっているということだと思う。安心してお浄土へと歩みましよう、とお話されました。

お知らせ

近年、お寺を会場として使用したいという依頼が増えてきました。恒例となりつつある観音寺の夜のまち歩き「よるしるべ」。本堂にランドピアノが置いてあることもあってか、各種コンサートの開催。昨年は教育関係のイベントもありました。地域が活性化する、みなさまが元気になる行事にはできる限り協力したいと思います。ご希望がございましたらご一報ください。

